【栃木 SC】2024Jリーグ新人研修　クラブ運営サポート活動レポート
川名　連介、井出　真太郎、中島　佳太郎、揚石　琉生

2024年 4月 30日（火）、宇都宮駅西口周辺で、川名　連介　選手、井出　真太郎　選手、中島　佳太郎　選手、揚石　琉生　選手が、ポスター掲出活動のクラブ運営サポート活動を行いました。

■関連部署

運営部

■活動内容、目的

宇都宮駅周辺の商店街、飲食店等に2024 栃木SC 中盤戦ポスターの掲出活動をご参加いただいたサポーター、クラブスタッフとともに実施いたしました。地域の皆さんとふれあい交流しながら栃木SC を認知してもらい、少しでも多くの方がスタジアムに足を運んでいただくことを目的としています。

◎選手のコメント

中島　佳太郎　選手

自分たちはこんなにも支えながら活動をしているのかと感じた。自分達のことを応援してくれている人たちが多くのポッスター掲出に前向きに了承し、温かい声援を肌で感じ、もっと自分の立場に自覚と責任を持ち日々成長しチームに貢献したいと思えた。

揚石　琉生　選手

私は、自分からアポを取ること自分から話しかけること説明をすることが苦手で、最初はとても不安だったけど、自分の成長のためだったり、チームのために自分から行動を起こすことの大切さを学ぶことが出来、それを実行することが出来たと思います。

川名　連介　選手

サポーターと会話しながら回ることで楽しく、また栃木SCのことをより知ってもらうことができとても有意義な活動となった。お店の方にも応援してもらえるありがたみを感じることができた。

井出　真太郎　選手

いつもチームを支えてくれているサポーターの方と一緒に行動ができて楽しかったです。もっと栃木SCが応援されるように自分が積極的に行動していきたいと思いました。

写真提供／栃木 SC

TOCHIGI SC

TOCHIGI SC
TOCHIGI SC
TOCHIGI SC

【栃木SC】2024Jリーグ新人研修　クラブ運営サポート活動レポート
朴　勇志

2024年11月10日（日）、カンセキスタジアムとちぎで、朴　勇志選手が、グッズ販売のクラブ運営サポート活動を行いました。

■関連部署
ファンベースグループ
マーチャンダイズチーム

■活動内容
試合でのグッズ販売
■目的
・サポーターとの交流
・社会人としてのモラルとマナー
・販売員としての対応
・クラブを知ること

◎選手のコメント
朴　勇志選手
普段このような活動する機会があまりなく貴重な経験をすることができた。
裏方の人達のおかげで成り立っているとすごく実感できました。

写真提供／栃木 SC

【栃木 SC】2024Jリーグ新人研修　シャレン！活動レポート
井出　真太郎、川名　連介、青島　太一、朴　勇志、揚石　琉生

2024 年 11 月 23 日（日）、宇都宮クールライフスポーツで、井出　真太郎　選手、川名　連介　選手、青島　太一　選手、朴　勇志　選手、揚石　琉生　選手が、サッカー療養のシャレン！活動を行いました。

① 地域・社会課題：
こどもの居場所・放課後デイサービス

② 協働者：
株式会社 KANOAS/宇都宮市/栃木 SC

③ 活動概要や内容、目的
核家族化や共働き家庭の増加、地域との関係の希薄化など、子どもを取り巻く環境が大きく変化しており、子どもの貧困、いじめや不登校、ヤングケアラーなど様々な問題も顕在化しています。またコロナ禍において、孤独・孤立化した家庭の増加など、関係性の貧困の状態にある子どもの存在が問題となっており、子どもの貧困対策はますます重要となってきています。
宇都宮市では、子どもたちが気軽に立ち寄ることができ、交流や活動を通して支援が必要なときは、手を差し伸べることができるよう学校でも家庭でもない第3の居場所「宮っこの居場所づくり」事業が始まりました。「親と子どもの居場所」と「子どもの居場所」を宮っこの居場所としています。その中の一つとして放課後デイサービスを行なっている株式会社 KANOAS さんと発達障害を知ること、そしてサッカーを通じて子ども達の 5 領域である「健康・生活」「運動・感覚」「認知・行動」「言語・コミュニケーション」「人間関係・社会性」 へアプローチをしていくサッカー療育を体験させていただきました。

◎選手のコメント
井出　真太郎　選手
最初のイメージはもっと言うことを聞かないと思っていたが、全くそうではなく人懐っこく接してくれて逆に子ども達からパワーをもらった。

川名　連介　選手
思った以上に元気のある子どもたちで勉強会で感じたこと違った。逆に元気をもらった。

青島　太一　選手
座学では発達障害を持っている子どもへの対応はとても難しそうであると感じていたが、実際に触

れ合うとサッカーボール1つで繋がれるというサッカーの素晴らしさを改めて実感することができた。サッカーというスポーツが結果を競うものだけではなく、療育という観点でも行われるというところにまた一つ魅力を感じた。このような領域があること知れてよかった。

朴　勇志　選手
最初の勉強会では接する距離感を掴めない子どもがいると知り、実際に活動してみるといきなり抱きつかれたりしたが、勉強会での理解があったため上手く接することができた。
理解した上でサッカー療養に移ったことでより積極的に楽しく子ども達と交流できた。

揚石　琉生　選手
一生懸命にサッカーする姿を見て改めてサッカーの素晴らしさを感じることができた。プロサッカー選手は、子ども達に夢を与えることができる素晴らしい職業なんだと思い、より一層頑張っていかなければいけないと再認識した。

写真提供／栃木 SC